

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(6) 平成12年8月1日

伊豆国の地誌(その2)

てんぽうさんねん いず き こう
天保三年・伊豆紀行(S291/15)

伊豆国君沢郡河内(沼津市)にある幕府管理の樟木の御林と、武蔵国新座郡の御薬園の検分を命じられた幕府浜御殿奉行木村喜繁(又助)が記した紀行文です。

幕命を受けた喜繁は駕籠に乗って天保3年9月27日に江戸を出立、10月1日夕方に長浜村(沼津市)四郎左衛門方に到着しました。喜繁は、前面に海が広がり、右手には富士山・愛鷹山が見えるという、景色のよい座敷に通されています。ただ、浜辺から魚の内臓を樽漬けたものの臭いが強く、夕食に焼き魚が出されましたが、この臭いが鼻について食べることができず、持参した梅干しで済ませたとあります。とにかく鯛や鮪だけが調理方法を変えて食前に並ぶのには喜繁も閉口し、帰途に立ち寄った熱海温泉で出された食事について、「一汁一菜にて有れとも仕立方よく、江戸出立後初めて心よく食事をいたしける」と記しています。長浜村での食事は、喜繁の口にはよほど合わなかったのでしょう。

樟木の検分は、2日に手代のものが下検分、翌3日は雨天のため中止し、4日に出かけることになりました。山道は険しく、駕籠では登れないため、喜繁は杖にすがりながら検分しました。途中河内村(沼津市)の畑では、竹矢来に囲まれたミカンの木が目についたとあります。樟木の多くは若木のため、すぐに樟脳を生成することはできないだろうと記し、立木の数や幹周りの計測を行い、翌日からは御林であることを示す杭の修繕を行っています。

一行は、10月10日に長浜村を出立、熱海の湯元今井半太夫家に宿泊。帰途、新座郡の御薬園の検分を行い、18日の午後4時頃に江戸に帰着しました。

幕命を受けての公用旅行でしたから、各宿場の人馬を利用してもよいという伝馬朱印状を携えていました。朱印状の威光は絶大なもので、宿々では宿はずれまで宿役人が出迎え、本陣に宿泊しました。喜繁も、「御威光の莫大なる事(中略)有り難さ江戸表にて思ひより八百倍も増」したために威儀を正したと書きとどめています。そして、亡き父母がこのような旅をしている自分の姿をみたならば、さぞや喜んだであろう、とも感慨を記しています。

喜繁は、この22日間の旅の感想などを公務日誌とは別に書き記しており、これをもとに翌天保4年3月に「伊豆紀行」を書き上げました。また、絵心のあった喜繁は、道すがら各地の風景も写生しており、その画帳「九十五年前の伊豆」(S291/15)も当館で所蔵しています。

【参考図書】 沼津市立駿河図書館編・発行「天保三年伊豆紀行」(S213/33/3)